

葵太句集



荻太句集秋之部

立秋



流ゆく茅の穂よ知るや此の秋
露とめて 穢れをくらやけさの秋
雉の川や一ひらぬの糸より
虫の音の下 前字やと秋の秋

一葉

わけがの 青紙中より一葉なる

曆月言一之桐日一書之

上又

此大元記舞法之目一歌

能中極一之元之元之

目一之元之元之元之

元之元之元之元之

元之元之元之元之

元之元之元之元之

元之元之元之元之

元之元之元之元之

元之元之元之元之

元之元之元之元之

八日早

元之元之元之元之

秋家

元之元之元之元之

朝顔やねまゆろーの幟や
姨捨まよふほひもそりせ
荒牧れ中よ瘦りり女影死

不動な納束愛さ

二童子れ白きも せうと新江死

志るさあき

志るの井やねまゆろまよふ志の子
鬼灯や三子人の秋の声

薔花死月の後をさうり哉
紅とくてもさうせー鳥死
松風の臺と根とある 蔭うね

魂系

月とねと人の影ありまよふり

亡所の新魂をむく

途大やまよひぬまねとのか
世中や朝とくさくは霊系

朝露の如きもの一瞬の
曇りゆく心の中
蓋牧場の小舎の
不意の出来事

二重の山を越えて
志るが如く

志るの井戸の底に
影の如く人の心の中

夢の如きものの後
紅い心の中
松風の音に
魂を

月夜の心の中
己の心の中

近大の心の中
夢の中の心の中

け客も懶はるはるを魂はつ
人のきく病とありつ玉糸

焼籠

秋くる松より秋ありき焼籠
焼籠の中よりさむし楊焼籠

確

秋風も人まのなむく確の所

系より

花くは旅人馬にありふ

稲妻

稲妻や園より渡る不破の園

冬虫

刈跡に花よりさう家蚕うれ

奥沢田玉川

追立る冬虫見えたりや川子る

稲

夕風や露も初に福むる

後府竹林精舎

けん推せよ花より小窓一具

紫陽花を小窓に盛るや草枕

け二白を父母より

刈るも田つとも嬉し五器一具

鳴子

引あけて松の月秋や鳴子縄

流るる水はあけくさや鳴子

流水

秋風の身を切りし流水の秋

月細くくさく減る流水の

業山子

人さきやめあゝのさる業山子

河内路をさるる

楠の根をさるる業山子

秋蠅

飯を喰ふ遠くあるなり秋の蠅

秋蝶

うさぐれとやうあまの秋の蝶
葉のうさぐれとやうあまの秋の蝶

虫

目もくも野を歩くなり虫の声
眼を明く至寐なりなり虫の声

虫の音や耳に聞えあけて来つと
我れ此處に坐す秋の音なり
冬の風の揚るに秋の音なり
あまの音なり秋の音なり

文月十日あまの天府雅志

長秋の音の月なり

うさぐれとやうあまの秋の音

比喩の音なり

作るにけり

虫より来れ露なり砂糖水

蜻蛉

動く糸は目よりおきて蜻蛉が

旁

是出かゝる様むと旁るを

松崎より

朝露やけり無れは松の

秋風

秋風やうそめり糸より

秋風より羽類は胡蝶の形

秋浦吟

秋風や寝もあむく花よりさ

言館懐古

山よりえ川からくさる秋の風

仙臺藤定庵留別

名は川細く流る素乾のあと

さうりーいーの人の傍も思ひ出

跡はみ古はるぬ秋の風

秋柳

いそぐや揺ひるささき柳

花野

あけぬきけりあけぬき花野

追剥は夜をぬりてささき柳

秋夜

合欽の木の枕枕せん老乃秋

須磨

宿僧く寐さぬあけぬき須磨の秋

孤宿湖あり

秋のあけぬきをむすて柳を

あけぬきをむすれ

喰ふ初め七玉川や船乃秋

上総千種溪

あゝ波の深ふあゝやふさふさ

露

白露の果ちありりりわ玉川

農家よ十の光を笑へ

米の秋杵ふり揚る 翁の形

秋言

后同を一里くくと秋のくれ

陸つゝ乃るもるさく秋の言

潮見坂

亦碎く海とふんえに秋の言

曇りし顔を見合はる秋のくれ

眠れと曇るもね

木杵を力ありりり秋のくれ

我座を客と立ちあひ秋の言

言執権

拾りし海帆のしるし 秋の書

言骸毛紙寄懐古

礎をうくる余しるし 秋のしるし

蕎麦花

蝶子の目めと 後候や蕎麦花

蕎麦

傾城に楽屋おそろし 唐土

瓢

うろくしるし 花のあり 瓢のふ

唐

二ねくしるし 想し 唐の唐

一ふれ 芋のさるや 唐の唐

初唐や平砂より 唐の唐

初丁や山中と 唐の唐

小鳥

連雀や 唐の唐 松の中

百舌鳥の来て一荒るや
ひよとり此一羽さうぬ
歌しといふや

文殊堂納

山雀や文殊堂のむね

武庫山

武庫山の賦さうか

下総浦つひ二句

朝風や小雀乃そらみ
鶴鈴や潮来おし

芭蕉

深魚て秋とけさく
さひーはの来る

木実

おるく時めく柿の梢

待宵

待宵やささるくは女房事

良秋をふ比葉直り温泉のふ

りと送る

月如時そらへ向ふとさへけ

良夜

月をさく月よ此方の入秋の月

さへふ思ふぬ秋くさの月

名月れさうして照やるる水

名月や葉をさる露を秋さう

名月や沙漏あけくさくは蟹

名月や秋くさくさくは花さる

二列橋を接石別荘

うっううささ枝の楊やうの月

更科

さへ月をさるを回あうか

僧とたぐはる屋の門やうの月

深川舟道遠

川とく世川下や舟のまゝと芭蕉翁の
中されーめな松もや五砂より

十人の月をたなや松をとり

麻路

管船を神代の宿より月をとり
名月や何はく音もさうり白
名月や物うのさうと西へや

危啼く溪村の松乃月歌ふ
名月や煙をけと風さうりより

一谷ふく

古くこの家ある波や須磨の月

十六夜

紫屋寺ふく

いさよひや園うゝあやう麻の声
十六夜やあやひハ園のおもさう

初汐

初汐や竹の裏ゆく人の声

野分

金縷くく風吹く時ふれ

釣途

旅人れく金揺るや釣むく

相撲

大肉の砂と古唐や角力とり
志何くく矢さくく相撲取

眠江亭

角力くく男美人庭花秋

夜寒

半ふくく花江芦火の秋寒が
竹葉く枝横宿れ秋寒が
抱籠み抱籠み並秋寒くわが

菊

荒くく病もくくすくや菊の花

まのいゝに客と亭主と白菊と
あゝ菊や花いふはさく葉の葉
傾城の枕踏るや 菊はうり
蝶をうつ菊より喰入目わが
一糸葉うゝ 沙やまぐらに花

溪村重陽

魚れ名も菊笑くの糸うね

本居路

あゝに祖父ある菊は山路うね

染心とく

あゝ菊やいづれ花は言乃うり

白さふさふと世の苔もや菊合

後月

あゝうゝ菊はあやや十二秋

懶はぬん あり 後の月

白魚れかゝと 物や後の月

金沢より

隈くち海に燐火や十二秋

新蕎麦

新蕎麦とくそ二盃の夏の夜
新蕎麦や新蕎麦と悟る柿の音

草

草花や月の干浮の小松より

上総社の浦

橘姫入りの時沙衣の流るるあそびを

まゝと神の浦よりあそびより

貞婦の標も忍び出さるる

笑うるぬ松や神むく波の音と

尾鰐鴨

尾鰐鴨と命より一鴨乃声

うき枯

うき枯や迹ぬあそび九木橋

紅葉

秋意

秋意

秋意

秋意

秋意

登りけり 柳味 雪のうきみ 雪が

夏 建武のを 眺樓より

さる けり 雪月比の花 欠り 柳

麻

麻のきりや 雪月比の花 欠り 柳

新酒 濁酒

山 紫より 雪月の涙より 柳

新酒あり 柳より 船の 西より 人

隈をさすの 雪月の涙より 柳

落し 水

帆の 雪月比の花 欠り 柳

新綿

里を 今綿あり 雪月比の花 欠り 柳

九月 雪

秋風より 雪月比の花 欠り 柳

蓼太句集冬之部

初冬

初冬これ機り入るやきりきり

時西

桂ふり松み志のくやふつ時西
秋風を養ふり結つて初志を
笑ふふぬ葉ふふ落ちりふつ時西
雪れ笠さうりあがり初志くれ

夜庭

傘多むむ多ふあそくれ初
くつねんれ松の葉はりる時西
秋めりく秋み蟹ぬる志く是か

小春

葉ふを端くおけく懐む小春ふ
山々今樵夫の笑ふ小春の那
涙ふる目うく能似て小春うけ

駿河の人々よあはれ時

月形川の麓なりけり小春風

十夜

我意を染ふは成る十夜うれ

は切

は切や苔れ價も唐みしに

芭蕉忌

百回忌を七十年の今日よき

こゝて深川要津禪ちよおのけ塚

造立のわくゝ西上人の死の影をて

我死んと悔せしこゝをさひかく

我祿ふ小春の年や十二日

駿河路や急橋も茶の白ひとほ

桃舟亭よ無のりあはれ

もは秋意や飯をゆくり茶は深ん

掛川よりおろる布をまきひて

駿河の人々よあきらめし時

月影の霞なりなり小春風

十夜

我意爲安之取百十粒之肌

切

江切や苔れ價も磨みし起

芭蕉忘

百回忌を七十年の今日より

こしそ 深川要津 禰ちよおのり塚

造立の折々西上人の花の影を

我久んと誼せし道一に及ぶ

我祿不小康也 十二日

駿河路や、急櫓も糸の白ひとほ

棧舟亭上無乃安

冬枯や人よハ菊北居士あつと

落葉

又春の来るも思ふぬ落葉うか

雜冬

さむしけの服の仍方や石路の雪
十月の何々急うや花とみち
多くとへて罪なき處の干菜哉
枯柳 花の飯うううとあり

何の犬や家よけさる虎を
半の尾の介さうとうぬ枯葉か
夕雲れ藤れさうさやうさお
灰とみ先何侍ん冬ふとり

海花

おのてきる地土の本のちや海花
まふと思ふ目とあり花

大楠

あはれなる宮女の中より大楠の

巨艦

死つゝと嘘つゝと居る巨艦哉
去るゝと巨艦と園に成秋の如

風

来りしや瀬田の如きは月より
風より来りしは桂の如き

水仙

河竹の名より流れ水仙花

双巾

きう様を先細割る双巾の如
傾城の市より隠れて双巾哉

紙子 衾

三三の京女姫嫁あり紙衣を

客をよむ日の夢を如くをみる

平日の閑より一夢

客の来り我より何る紙子か

機久の續

きれくれきやわつて又食

老當果

戸さぬを我端より紙ゆき海

あやしく

菜大根、鶏、魚、を充てやうりん

細代ち

世よりのもくは細代ち

ぬくぬく

凡そぬくものもぬくぬく

ある時ちいひきやぬくぬく

顔見せ

顔見せや白粉を菊のち

そのころは話をしてはるる笛

うしろ秋の麻うめとあやうや

いづれをせむとて荒の下にたうとも

蟹室

蟹室や一記喰ひあつても海

寒

針立の門多くなり寒の声

橋より橋よりとて寒の聲

氷 氷柱

障子をくぐるのあやを川 氷

鴨を―秋の氷いほとまき
一糸―といひ日れ氷柱の影

炭

賣よりも炭人をも―炭二鉢

枯柳

枯くも月を柳の浅敷うか

水鳥

只一羽離るまで川 秋鴨の声

響響れちきりや響の在なり

子音

押ふく月あう出れむくも
こもあもそちうおあきて湧る
鈴ふちうくくくちう式
動けく居れ氷はうむ湧
ふ多帰夜や名月の照れ

音

曉を思れと風あり秋の音
隆くそ音のおもや水車
音より音れくや音の松
音の川起の掉くそ小舟か
白き水の中灯のそ音の
けこゝの雲はくそ音の

信より音

掃ふせん音の音の音の

途中の吟

ちるりなるたよあつりり秋の香
富河と八百屋さうすや夜更香
簑笠とちりり湧りり雪の友
念ふ念佛

極楽も夢魘なりなり念ふ念佛

神和

ちるりなるたよあつりり秋の香

ちるりなるたよあつりり秋の香

猿掃

芭蕉翁のひとせを猿あり

横町ちりり居をうりり

袖の香の簑笠とゆりり猿掃

夜配

ちるりなるたよあつりり秋の香

年内立春

今年とも去年とも思ふ所を折ふ

年内立春は百年にすれ僅く

臨みよ

去の日よりうき世や年忘

年忘後来る根の本のるを

夜する汲く忘井を作の家

泣くみまの悲ひをなむ

麻する草庵の田

三絵を廬山れぬやわりの書

我弟の戸に家を此肆よりく

麋鹿のけいを書く猫はなむ

金銀れ親よりお氷を昨より昨

浮破利の氷よりうき世をうか

起る世よりく世をうき世をうか

酒肆ハ外よりいふ茶肆ハ

秤は事志りくと昨をうか

とほ——りて

鼓屋と浮世——の年

厄拂——環をに月歌の非

寶舟

を——紅嵐を——ぬ——る非

空は名残ほそんとある雲大

葛巾の素つあり神を——る

武吉あり紅琵琶を——る

細く——るやのたり

簾笠の鷹の——る

東京未明衣裳轉倒

秋成り蝶を——る年の暮

み——るは猿——る

食の下外せ——妹の背山の傍

眼のあ——る

機と——る文や古曆



University of Toronto
Library
6622-1914

集
卷
八
秋
雜